

# 文芸史の側面から農村と都市を繋ぐ試み

西澤 治彦

本書は、中国近世の文芸を論じたものであるが、副題に「農村祭祀から都市芸能へ」とある如く、農村と都市との関係も柱の一つとなっている。もとより評者は文芸史を専門とする者ではないが、農村と都市との関係に関心を持つ者として、興味深く本書を読んだ。本稿では、評者の専門である文化人類学の立場から、この刺激的な論文集が提起する問題を考えてみたい。

本書が編纂された意図は、小南一郎氏の「はじめに」に端的に記されている。小南氏は、宋代以降を近世とする立場から、経済力を身につけた一般庶民の動向が宋代以降の文化を大きく方向づけてきたとし、一例として、宋代になると、唐代の文言小説の技法や創作意識は受けられることなく、新しい環境のなかで白

話小説が台頭してきたこと、その背景には芸人による語りがあったとし、こうした語り物文芸は、明代にはいつて長編章回小説として出版され、一つの完成をみたとしている。また、語り物文芸が近世時期のものを基礎としているように、現在の京劇や地方劇も、元代の雜劇の系譜を引くものではなく、明清時期に生み出された筋書きを基礎としている。これらの文芸は、個々のテキストが独立して存在するのではなく、その存在意義は、演じ手、聴衆、演じる場、そして地域社会と演目との関わりの中にあつたこと、中国芸能史の研究では、宗教儀礼からどのように芸能が分離していったのかを説明する必要があるが、そのためには、芸能と地域社会との結びつきの実態を明らかにする必要がある、としている。幸い、

財団法人東洋文庫東アジア資料研究班  
田仲一成・小南一郎・斯波義信編著  
中国近世文芸論  
——農村祭祀から都市芸能へ



A5判 336頁  
東方書店 [4830円]

現在では各地で伝統芸能が復活し、その調査も可能になってきている。こうした状況にあつて、中国における多様な文芸を相互に位置づけ、全体的な見通しを得ることが急務であり、そのための見取り図を作るのが本書の意図である、としている。

§1の田仲一成氏による「問題の提起」は、本書の基調をなすものである。田仲氏は、農村文芸と都市文芸の差は環境の差にあるとし、近世におけるその差は相対的なものであつたと考え、祭祀性（呪術性）の強弱という視点から両者を検討する。その際、農村性から都市性へ、祭祀性から鑑賞性へという二つのベクトル

を交叉させ、四つの類型を提示している。即ち、農村性を保ちながら祭祀性を保持しているものとして、郷村祭祀（巫歌、山歌、農村祭祀など）を、農村性を保ちながら鑑賞性が強くなったものとして宗族祭祀（宗族演劇、相声歌謡など）を、祭祀性を保持しながら都市性が強くなったものとして、市場祭祀（聯歡芸能、市鎮祭祀演劇など）を、鑑賞性が強くなり、且つ都市性も強くなったものとして、府県城市（文芸性説唱・歌謡・演劇など）をと、さまざまな文芸をこの四類型にわけ、その相関関係を論じ、農村性、祭祀性の強いものから弱いものへ向かって推移する（基本的にその逆は起こらない）との仮説を立てる。もともとこの類型は、エスニックグループ（方言や宗教性などを共有する集団）ごとに独立して成立するとし、香港新界の具体的な事例をあげながら、類型間の関係を論じている。

その上で田仲氏は、近世の中国で日本のような都市演劇が発達しなかった理由として、中国では都市居住者が血縁、地縁、業縁などの集団に分割されていて

「市民社会」が未成熟に終わったためではないか、との推論をたてている。つまり演劇は血縁集団の祠堂、地縁集団の同郷会館、業縁集団の会館など閉鎖的な舞台で上演され、市民に開放された劇場が成立せず、都市民独自の演劇が発達しなかった、というわけである。京劇や地方劇といった都市芸能といえども、まだ農村芸能の要素を脱しておらず、中国近世はその変化の過渡期であったとしている。

§2の「地域芸能の基礎」には五本の調査報告が収められている。調査は湖南と広東からの報告を除くと、江南地方に集中している。即ち、儺舞が高淳鳳凰山鎮永城村、童子戯が如皋市東陳鎮山河村、環家愿儀礼が藍山県滙源郷湘藍村など、多くが農村での調査に基づく。これらの報告を読むと、調査者の長時間におよぶ観察と記録の苦勞が伝わってくる。

と同時に、農村レベルで行われる伝統芸能というのは、単調な内容のものが延々と続くもので、娯楽のない農村においてはこれが唯一の楽しみになっている、というのも伝わってくる。調査報告の中で

も田仲氏のものは、理論的な問題意識に基づいている。即ち、中国近世の演劇は、郷村の祭祀儀礼にその起源をもっているが、その展開は農村市場地（定期市）において実現されたこと、換言すれば、演劇は農村で生まれ、市場地で育ったとし、そのことを珠江デルタを例に論じている。

§3の「地域を越える芸能、都市芸能へのみち」には四本の論考が寄せられている。いずれも文芸テクストを含む史料を駆使した歴史的な研究であり、テーマも元代以降の詞話、杭州を起源とする白蛇伝、明末蘇州の文人の文芸活動、民国期の上海京劇の変容と、多岐にわたる。農村と都市村の関係のみならず、時間軸にそって芸能が地域を超えていく動きを捉えており、読み応えがある。個々の論文は、田仲氏の提示する類型とその展開の方向を念頭において読み進めると、理論的な枠組みが明確になってより興味深く読める。例えば、詞話の論考は、郷村祭祀から宗族祭祀の領域に跨る内容であり、白蛇伝の論考も同様に郷村祭祀から宗族祭祀の領域を経て、府県城市の領域

に達する広がりをもっている。明末蘇州の文人の文芸活動の論考は農村性と都市性という対比が貫かれているし、上海の京劇の論考は、都市間の交流を問題にしたものといえる。上海という地域性を理解すると、文革時、革命京劇が上海を舞台として生まれた歴史的な要因が理解できる。

84の「より広い視点から」には、二本のコメントが寄せられている。斯波義信氏が言及している問題は多岐にわたるが、常に人類学者らの調査研究にも目配りされている斯波氏ならではの概論で、都市と農村を切り離すことなく、ワンセットとして捉えることの重要性を指摘している。一方、金文京氏は、田仲氏の提示した文芸をめぐる都市と農村のモデルを「共時的仮説」ととらえ、その通時的な検証を試みている。即ち、文芸を、齊言句形式の詩讃系と長短句形式の楽曲系とに分け、その系統を具体的に追いつながら、田仲氏の提示した図式は、歴史的には農村の詩讃系芸能と都市の楽曲系芸能の消長関係、もしくは両者が混合して

ゆく過程として理解されるべきもの、としている。また、楽曲系の起源は西アジアの影響で都市において成立したものであり、農村の文芸が都市に入って洗練されたものではないとしている。この二つの潮流はその後、相互に影響しあい、複雑な様相を呈するようになるが、それは都市部と農村部との交流が行われたからであり、その交流を促した要因として、人の移動をあげている。

田仲氏による「おわりに」では、従来の中国学に対する批判と今後の課題が提示されている。即ち、『漢書・藝文志』にみえる「礼失而求諸野」（礼失われてこれを野に求む）に象徴されているように、古来より中国では、官僚や士大夫らは都市部の礼にだけ価値を認め、農村部は単なる礼の受け皿としてしか見てこなかった。その結果、近世文芸の研究も含め、従来の中国学は都市文化、礼の文化に集中するあまり、農村部が視野から消えていた。しかしながら、近世文芸がいかに農村に依存しているかは本書からも明らかであり、今後は、農村部、さらには少

数民族までをも含めた「民俗学的・人類学的中国学」を構築していく必要がある、と唱えている。

さて、本書を通読してみれば、大方の読者は意外な印象を持つのではないかと思う。というのも、文芸は祭祀性の強いものから弱いものへ推移するというのはよく理解できるが、農村性の強いものから弱いものへ推移するというのは、文芸のルーツは農村の郷村祭祀にあるということでもあるからだ。我々はずいぶん洗練された文化は都市で生まれ育ち、それらが農村部に下りていくと考えてしまいがちだが、田仲氏のモデルは、文芸に関してはその逆であったということになる。中国人類学も当初から農村を重視してきた。しかし、それはフィールドワークが可能な小さなコミュニティから始めるという、人類学の成立当初からの方法論によるところが大きかった。こうした情況に理論的な展開をもたらしただのが、斯波氏もコメントで言及しているように、フリードマンやスキナーの研究であっ

た。即ち、フリードマンによって宗族組織の側面において、スキナーによって市場圏や都市のヒエラルキーの側面において、農村と都市をつなぐ回路のモデル化がなされ、中国人類学は新たな段階に到達した。だが、大多数の人類学者らは、都市の文化のルーツという観点では、農村をみてこなかったと思う。

農村から都市への流れで喚起されるのは、人材と物資の流れである。農村部は常に都市にとっての素朴な人材の源であった。近代の例では、毛沢東の「農村が都市を包囲する」といった発想にみられるように、こうした人のうねりは、組織されると巨大な権力となりうる。建国後は、戸籍による身分制度として農民は農村部に固定化され、「城郷差別」が生じた。それでも解放軍の兵士の多くは農村から供給されてきたし、改革開放以降、農村部は再び「民工」の供給地として脚光を浴びるようになった。概して、文革期の下放を除くと、一般に人の移動は農村から都市へと流れている。

官僚は、伝統的には県城レベルを境に、

中央からの派遣と農村から供給される双方向があったが、革命後も人材に関してはほぼ同じである。但し、党組織は末端まで行き届き、政策は常に中央から末端へと流れていく。この流れは改革開放以降も変わらない。物資のうち、農産物は農村から都市へという流れとなっているのに対し、工業製品はその逆の流れとなる。但し、手工業品など農村レベルでも生産されてきたし、その伝統は近年の郷鎮企業に引き継がれている。

文化一般はどうであろうか。本書はこれらのうちの、芸能についての考察であり、農村から都市への流れが存在したことを明らかにしている。では芸能以外の分野ではどうであろうか。例えば、宗教を考えてみると、イスラームやキリスト教など外来のものは都市を経由して末端に下りていくが、民間信仰は明らかに農村にそのルーツがある。葬儀や婚礼など、中国人の世界観を反映するような人生儀礼も、農村にこそ伝統的なものが根強く生き残っている。因みに、外来思想としてのマルクス主義も都市から流入したものであり、伝統的な農村の価値観とは本来、相容れないものである。こうしてみると、農村が供給源となっているものと、都市が供給源となっているものとがあり、その上で両者は絶え間ない交流を行っていた。

農村と都市の関係を考える上で忘れてならないのは、中国の場合、広大な国土故に、底辺の農村から頂点の首都まで、行政のヒエラルキーの深度が日本とは比較にならないほど深いことである。即ち、村落から首都までには、まず郷鎮レベルがあり、その上に県城レベルがあり、最後に省都レベルがある。末端の農民が首都に行く場合、このヒエラルキーの階段を一段一段上っていく。一般に農村というと、行政レベルでいう「村」をイメージしがちであるが、郷鎮は行政的にも、また中国人の意識においても、農村部の範疇に入る。田仲氏も図式では、郷鎮レベルの芸能は「市場祭祀」として都市性の強い類型に分類されているが、記述のなかでは、市場地を農村と都市とを媒介する位置にあるとしている。

これらの中間点を經由しながら、さまざまなものが農村と都市との間で行き来している。農村と都市をつなぐ上で重要な役割を果たしているのが、金氏がいみじくも指摘しているとおり、人の移動である。これと関連し、田仲氏も、広東の事例研究において、農民の都市流入は、種縁（エスニック・グループ）↓業縁↓地縁↓血縁の順で進行したと考えられるとしている。移住は血縁、地縁の順から始まると考えられがちだが、国内移住の過程、さらには華僑を生み出した海外への移住の例をみても、この順序となっており、人類学者の知見と同じである。即ち、同じ方言を話す同業、同郷の者が連れ添って移住し、数世代を経て生活も安定したところで、親族を呼び寄せ、血縁が強化されていく。

こうしたことを念頭におきながら、改めて本書を読み返してみると、残された課題として、時代性と地域性の問題が考えられよう。本書の主題は近世の文芸であるが、扱っている時代は現代にまで及ぶし、扱っている地域も広い。時代性の

問題でいうと、フィールドワークに常につきまとう問題に歴史的变化がある。個々の文芸には、中国革命や文革による中断、そして改革開放以降の再開、さらには近年の観光化といった背景がある。こうした断絶も含め、近世以降の文芸の流れと、現代の調査結果とをどうかみ合わせるのか、ということが次なる課題となろう。

地域性の問題でいうと、田仲氏は、提示したモデルはあくまで一般論であり、実際には方言集団ごとに独立して成立するとしている。即ち、全国にある約三〇〇〇県のうち、固有の都市芸能を持つ三〇〇ぐらいの県の都市文化を支える方言集団のみが、この図式の検討対象として適格であるとしている。従って、事例研究で示されたのは、その「広東バージョン」ということになる。このモデルに方言集団の要素を加えられたのは、文芸ならではの観点といえよう。今後、他地域での研究が進めば、比較研究を通してより普遍的なモデル化が可能となろう。一方で、この図式が適合するのは全国の一

割程度の地域でしかないという「事実」をどう解釈したらいいのか、といった素朴な疑問がわいてくる。残りの九割の地域はどのようなことになっているのか。加えて、そうした地域差が生じた地理的、歴史的な背景も解明されていけば、より詳細な全国の見取り図が可能となろうし、中国の地域性一般を考える上でも、興味深い。

改革開放の進む現在の中国において、農村や農民の問題が改めて注目されている。本書を読むと、歴史的に農村部がもつ底力を改めて感じないわけにはいかない。先述のスキナーのパラダイムでいうなら、本書は文芸史の側面から農村と都市とを繋ごうとする試みであり、中国研究一般にとつても、注目すべき問題提起の書といえる。

（にしざわはるひこ 武蔵大学）

